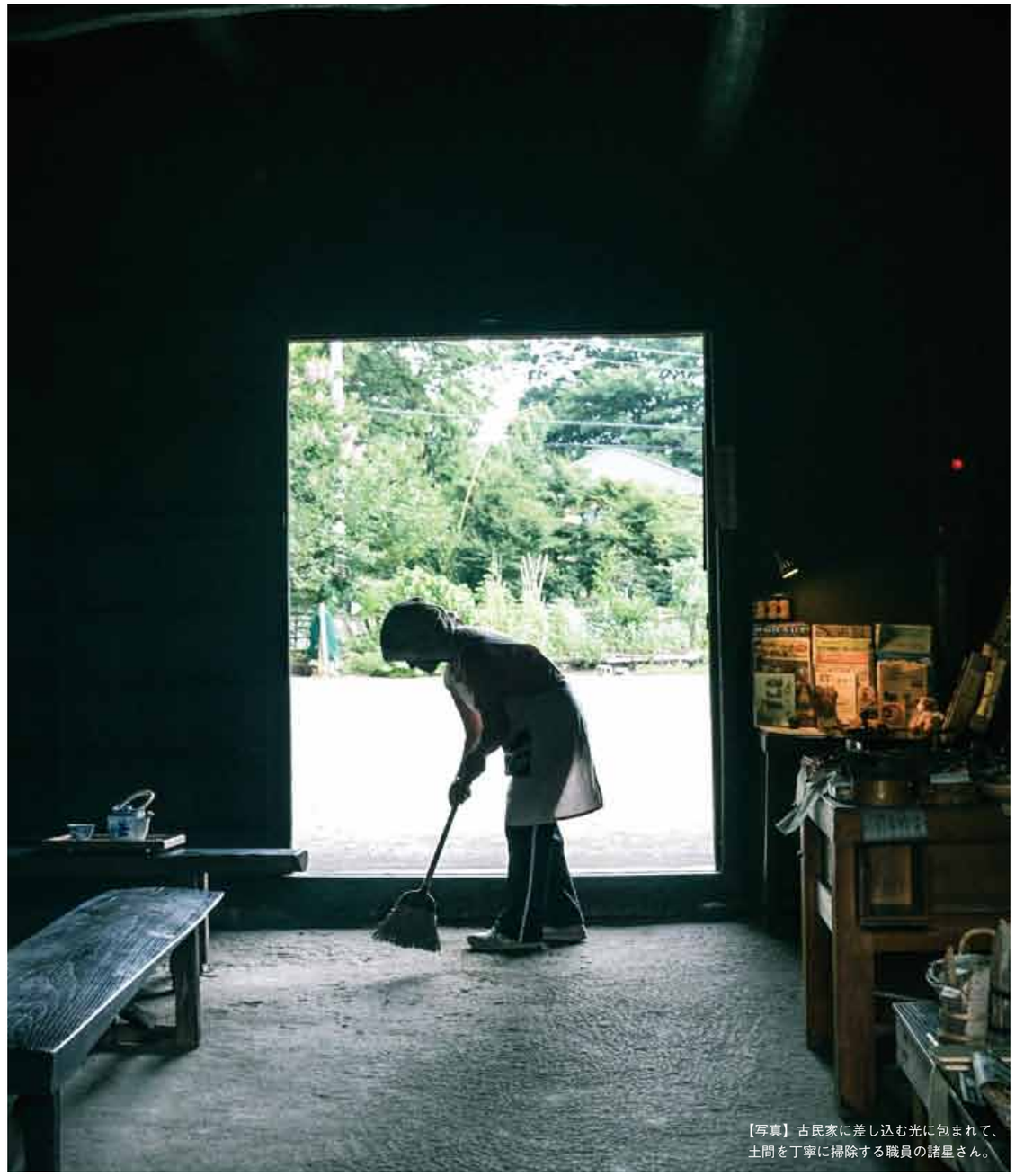

【写真】古民家に差し込む光に包まれて、土間を丁寧に掃除する職員の諸星さん。

ずっと想いがつながる場所

行って、民家（みんか）。

秋の足音が聞こえるいも街道沿いに佇む古民家、旧島田家住宅。
そこに関わる人々と込められた想いに迫ります。

①手前の空間は簡単な接客に使われる「ザシキ」。奥の部屋は「ゼイ」と呼ばれる、正式な接客の場です。寺子屋の教室としても使われていました。②囲炉裏で沸かした温かいお茶を提供しています。③土間にある大きなカマド。当時の生活が垣間見えます。①

④寝室として使われていた「ヘヤ」。⑤馬を飼うための「ウマヤ」。⑥「コザ」と呼ばれる収納スペース。⑦旧島田家住宅に勤務する職員手作りの工芸品。土間で販売中。⑧常時展示されている木の実や植物の種。

食欲の秋。「富の川越いも」ののぼりがはためくいも街道を散策すると、昔話に出てきそうな古民家「旧島田家住宅」が目に飛び込んできます。江戸時代後期に農民の家として建築された住宅。一歩足を踏み入れるとまるでタイムスリップしたかのよう。囲炉裏の香りに包まれ、静寂の中に薪が燃える「パチパチ」という音だけが響きます。大きなかまどや縁側など、当時の人々の生活が垣間見える空間――。そんな場所があることをご存知でしたか。

庶民の生活が向上し、人々の学習の欲求が高まった江戸時代後期に、この家に住む島田伴完（伴左衛門）が家の一室で始めたのが寺子屋です。集まった子弟たちに読み・書きだけでなく、質素倹約や食物の大切さなども説き、上富小学校ができるまでは村の教育の中心地でした。この教えを求めて、現在の所沢市や川越市、東京都などから通う人もいたと言われています。

現在は「現代の寺子屋」として郷土学習や交流の場に利用されている旧島田家住宅。次のページでは旧島田家住宅に関わる人々とその想いに迫ります。■